

中近世移行期村落における宮座と家

大和国竜門惣郷を中心に

蘭部寿樹

Miyaza and the Family in Villages in the Transition Period from the Middle Ages to the Early Modern Times: Focusing Yamato-no-kuni, Ryumonsojo

はじめに

- ① 竜門惣郷の祭祀組織
- ② 竜門惣郷と家
- ③ 竜門惣郷と新座衆
- ④ 竜門惣郷と村
おわりに

【論文要旨】

本論文は、中近世移行期（二六世紀―一七世紀中期）の村落における宮座と家との関連を考察したものである。

研究対象は、竜門宮（天満宮・大汝宮）を結節点とする、大和国竜門惣郷（現奈良県吉野郡吉野町竜門地域）である。竜門惣郷は、小河川灌漑を基盤として、竜門七郷（西方・竜門川流域）から東方（津風呂川流域）へと展開した地域である。

竜門惣郷の頭役帳である大頭入衆日記の記載の変化から、一六世紀中期までに竜門惣郷宮座に家の論理が導入されたことを明らかにした。宮座に導入された家の論理は、本来は座衆相互の平等規範であった。そして家の継承による座の継承が規範化し、また宮座によって座衆の家の継承が認知されるようになったものと思われる。

そして当該期、家の全般的な確立・普及を背景にして、宮座から従来排除されていた階層が、新座衆として台頭してきた。それは、惣郷財政の動揺と家役の賦課を契機

としたものであった。宮座における家の論理の導入は、結果的には宮座を変質させる回路となったのである。

新座衆の台頭は、竜門宮頭役の惣地下営みという形で個別村落宮座を顕在化させた。地域別勤仕順の形成と惣地下営みによる頭役勤仕は、祭祀者の意識を次第に竜門惣郷宮座から個別村落宮座へと傾斜させた。そこに惣郷祭祀と個別村落祭祀の二重負担という重圧が加わり、個別村落宮座に祭祀者が結集したため、近世の竜門惣郷宮座は次第に衰退していったのである。

最後に、中世から近世にかけての村落における宮座を村落内身分から家格制への流れのなかで把握することの重要性を指摘した。そしてこの課題を解明するために、村落文書上の「長男」の語義が「乙名」から「長子」へと変化する時期とその過程や背景を究明することが必要である。